人魚の姫

(ハンス・クリスチャン・アンデルセン)

海のおきへ、遠く遠く出ていきますと、水の色は、いちばん美しいヤグルマソウの花びらのようにまっさおになり、きれいにすきとおったガラスのように、すみきっています。けれども、そのあたりは、とてもとても深いので、どんなに長いかり綱をおろしても、底まで届くようなことはありません。海の底から、水の面まで届くためには、教会の塔を、いくつもいくつも、積みかさねなければなりません。そういう深いところに、人魚たちは住んでいるのです。

みなさんは、海の底にはただ白い砂地があるばかりで、ほかにはなんにもない、などと思つてはいけません。そこには、たいへんめずらしい木や、草も生えているのです。そのくみや葉は、どれもこれもなよなよしています。ですから、水がほんのちよつとでも動くと、まるで生き物のように、ゆらゆらと動くのです。

それから、この陸の上で、鳥が空をとびまわっているように、水の中では、小さなさかなや大きなさかなが、その枝のあいだをすいすいとおよいでいます。

この海の底のいちばん深いところに、人魚の王さまのお城があるのです。お城のかべは、サンゴでつくられていて、先のとがった高い窓は、よくすきとおったこはくできています。それから、たくさんの貝がらがあつまつて、屋根になっています。貝がらは、海の水が流れてくるたびに、口をあけたりとじたりしています。その美しいことといったら、

たとえようもありません。なにしろ、貝がらの一つ一つに、ピカピカ光る真珠がついているのですから。その中の一つだけをとって、女王さまのかんむりにつけても、きつと、りっぱなかざりになるでしょう。

そのお城に住んでいる人魚の王さまは、もう何年も前にお妃さまがなくなつてからは、ずっと、ひとりでくらしていました。ですから、お城の中のご用事は、お年をとつたおかさまが、なんでもしているのです。おかあさまは、かしこい方でしたが、身分のよいことを、たいへんじまんにしていました。ですから、自分のしつぽには、十二も力キをつけているのに、ほかの人たちには、どんなに身分が高くても、六つしかつけることをゆるさなかつたのです。でも、このことだけを別にすれば、どんなにほめてあげてもよい方でした。わけても孫むすめの、小さな人魚のお姫さまたちを、それはそれはかわいがっていました。

お姫さまは、みんなで六人いました。そろいもそろって、きれいな方ばかりでしたが、なかでもいちばん下のお姫さまがいちばんきれいでした。はだは、バラの花びらのように、きめがこまやかで美しく、目は、深い深い海の色のように、青くすんでいました。でも、やっぱり、ほかのおねえさまたちと同じように、足がありません。胸のおしまいのところが、しげんと、さかなのしつぽになつていたのでした。

一日じゅう、お姫さまたちは、海の底の、お城の中の大広間であそびました。広間のかべには、生きている花が咲いていました。大きなこはくの窓をあけると、さかなたちがおよいではいってきました。ちようど、わたしたちが窓をあける

と、ツバメがとびこんでくると同じように。さかなたちは、小さなお姫さまたちのそばまでおよいできて、手から食べ物をもらったり、なでてもらったりしました。

お城の外には、大きなお庭がありました。お庭には、火のように赤い木や、まっさおな木が生えていました。そういう木々は、くみや葉を、しょっちゅうゆり動かすので、木の実は、金のようにかがやき、花は、燃えるほのおのようにきらめきました。底の地面は、とてもこまかい砂地になっていましたが、いおうのほのおのように、青く光っていました。

こうして、あたりいちめんに、ふしぎな青い光がキラキラとかがやいていましたので、海の底にいるような気がしませんでした。頭の上を見ても、下を見ても、どこもかしこも青い空ばかりで、かえって、空高くに浮^{うか}んでいるような気がしました。風がやんでいるときには、お日さまを見ることもできませんでした。お日さまは、むらさき色の花のようで、そのうてなから、あたりいちめんに光が流れ出てくるように思われました。

小さなお姫さまたちは、お庭の中に、自分々々の小さい花壇^{かだん}を持っていました。そこでは、自分の好きなように、土をほったり、お花を植えたりすることができました。ひとりのお姫さまは、花壇をクジラの形に作りました。もうひとりのお姫さまは、かわいい人魚の形にしました。ところが、いちばん下のお姫さまは、お日さまのようにまんまるい花壇を作っていました。お日さまのように、赤くかがやく花だけをうえました。

このいちばん下のお姫さまは、すこしかわっていて、たいへんもの静かな、考え深い子供でした。おねえさまたちが、浅瀬^{あさせ}に乗りあげた船からひろってきた、めずらしいものをかざっ

てあそんでいるようなときでも、このお姫さまだけはちがいました。お姫さまは、ずっと上のほうにかがやいているお日さまに似た、バラのように赤い花と、それから、美しい大理石の、たった一つの像だけを、だいじにしていました。その像というのは、すきとおるように白い大理石にほった、美しい少年の像で、あるとき、難破した船から、海の底へしずんできたものだったのです。

お姫さまは、この像のそばに、バラのように赤いシダレヤナギをうえました。ヤナギの木は、いつのまにか美しく、大きくくなりました。若々しい枝は、その像の上にかぶさって、先は青い砂地にまでたれさがりました。すると、枝が動くにつれて、そのかげがむらさき色にうつって、ゆらめきました。そのありさまは、まるで、枝の先と根とが、たがいにキスをしようとして、ふざけあっているようでした。

お姫さまたちにとっては、上のほうにある人間の世界のお話を聞くことが、なによりの楽しみでした。お年よりのおばあさまは、船だの町だの、人間だの動物だのについて、知っていることを、なんでも話してくれました。そのお話の中で、お姫さまたちが、なによりもおもしろく、ふしぎに思ったのは、陸の上では、花がよいかおりをして、におっているということでした。むりもありません。海の底にある花には、なんのにおいもないのですからね。それからまた、森はみどりの色をしていて、木の枝と枝とのあいだに、見えたりかくれたりするさかなたちは、美しい、高い声で、楽しい歌をうたうということも、ふしぎに思われました。おばあさまがさかなと言ったのは、じつは、小鳥のことでした。なぜって、そ

うでも言わなければ、まだ鳥を見たことのないお姫さまたちには、どんなに説明しても、わかるはずがありませんからね。「おまえたちが、十五になつたらね」と、あるとき、おばあさまが言いました。「海の上に浮びあがることをゆるしてあげますよ。そのときには、明るいお月さまの光をあびながら、岩の上に腰をおろして、そばを通っていく大きな船を見たり、森や町をながめたりすることができるとですよ」

つぎの年には、いちばん上のお姫さまが十五になりました。あとのお姫さまたちは、年が一つずつ下でした。ですから、いちばん下のお姫さまが、海の底から浮びあがって、わたしたち人間の世界のありさまを見ることができるようになるまでには、まだまだ五年もありました。

そこで、お姫さまたちは、はじめて海の上に浮びあがった日に見たことや、いちばん美しいと思つたことを、帰つてきたら、妹たちに話そうと、たがいに約束しあいました。なぜって、みんなは、もう、おばあさまのお話だけでは満足できなくなつていましたからね。お姫さまたちが人間の世界について知りたいと思うことは、とてもとてもたくさんあつたのです。

とりわけ、いちばん下のお姫さまは、海の上の世界のながめられる日を、だれよりもずっと強く待ちこがれていました。それなのに、いちばん長いあいだ待たなければならぬのです。けれども、お姫さまは、もの静かな、考え深い娘でした。幾晩も幾晩も、開かれた窓ぎわに立って、さかなたちがひれやしっぱを動かしながらおよいでいる、まっさおな水をすかして、上のほうをじっとながめていました。すると、お月さ

まやお星さまも見えました。その光は、すっかり弱くなって、ぼんやりしていましたが、そのかわり、水をとおして見ていますので、お月さまもお星さまも、わたしたちの目にうつるよりは、ずっと大きく見えました。

ときには、黒い雲のようなものが、光をさえぎって、すべっていくこともありました。それは、頭の上をおよいでいくクジラか、でなければ、大ぜいの人間を乗せている船だということはお姫さまも知っていました。でも、船の中の人は、美しい小さな人魚のお姫さまが、海の底に立っていて、白い手を、船のほうへさしのべていようとは、夢にも思わなかつたことでしょう。

さて、いちばん上のお姫さまは、十五になつたので、海の上に浮びあがってもよいことになりました。

このお姫さまが、海の底に帰ってきたときには、妹たちに話したいと思うことを、それはそれはたくさん持つていました。お姫さまの話によりますと、いちばん美しくつたのは、お月さまの明るい晩、静かな海への砂地に寝ころんで、海岸のすぐ近くにある、大きな町をながめたことでした。その町には、たくさんさんの光が、何百とも知れない星のようにかがやいていたということでした。それから、音楽に耳をかたむけたら、車のひびきや、人々のざわめきを聞くのもすてきなことでしたし、また、たくさんさんの教会の塔をながめて、鐘の鳴るのを聞くのも楽しかつたそうです。いちばん下のお姫さまは、まだまだ、しばらくのあいだ、海の上へ浮びあがっていくことができないだけに、だれよりもいっそうあこがれて聞きました。

ああ、いちばん下のお姫さまは、どんなに熱心に、そういうお話に耳をかたむけたことでしょう！ それからというもの、夕方になると、あけはなされた窓ぎわに立って、青い水をすかして、上のほうを見あげるのです。そして、そのたびに、いろいろなもの音のするという、大きな町のことを、心に思ってみるのです。すると、そんなときには、教会の鐘の音までが、遠い海の底の、自分のところまで、ひびいてくるような気がしてならないのです。

一年たつと、一番めのお姫さまが、海の上に浮びあがって、どこへでも好きなところへおよいでいってよい、というおゆるしをいただきました。

お姫さまが浮びあがったとき、お日さまがちょうど沈むところでした。そのながめが、このうえもなく美しく思われました。空いちめんが金色にかがやいて、と、これは、お姫さまのお話です。雲の美しいこと、ほんとうに、そのありさまは、言葉などでは言いあらわすことができません。雲は赤く、スミレ色にもえて、頭の上を流れていきました。けれども、その雲よりもずっとずっと速く、ハクチョウの一むれが、長い白いベールのように、一羽、また一羽と、波の上を、今しずもうとしているお日さまのほうにむかって飛んでいきました。お姫さまも、そちらのほうへおよいでいきました。しかし、まもなく、お日さまが沈んでしまうと、バラ色のかがやきは、海の面からも雲の上からも消えてしまいました。

また一年たつと、今度は、三番めのお姫さまが、海の上に浮びあがっていきました。

このお姫さまは、みんなの中で、いちばんだいたんでした

から、海に流れこんでいる、大きな川を、およいでのぼっていきました。やがて、ブドウのつるにおおわれた、美しいみどりの丘が見えてきました。こんもりとした大きな森のあいだには、お城や農園が見えたりかくれたりしています。いろんな鳥がさえずっているのも聞えてきました。お日さまがあまり暑く照りつけるので、何度も何度も水の中にもぐっては、ほてった顔をひやさなくてはなりません。

小さな入り江に来ると、人間の子供たちが、大ぜい集まっています。みんなまっぴだかで、水の中をピチャピチャはねまわっていました。人魚のお姫さまも、子供たちといっしょにあそびたくなりました。ところが、子供たちのほうでは、びっくりして、逃げていってしまいました。そこへ、小さな黒い動物が一びき、やってきました。じつは、それはイヌだったのです。でも、お姫さまは、それまでに、イヌというものを見たことがありません。それに、お姫さまにむかって、イヌがワンワンほえたたえたものですから、お姫さまはすっかりこわくなって、また、もとの広々とした海へもどってきました。それにしても、あの美しい森や、みどりの丘や、それから、さかなのしっぽもないのに、水の中をおよぐことのできる、かわいらしい子供たちのことは、けっして忘れることができませんでした。

四番めのお姫さまは、それほどだいたんではありませんでした。ですから、広い広い海のまっただ中に、じっとしていました。それでも、お姫さまの話では、そこがいちばん美しいところだったということです。どちらを向いても、何マイルも先まで見わたすことができました。空は、大きなガラス

のまる天井かと思われました。ときどき目にうつる船は、ずっと遠くに、カモメのように見えました。ふざけんぼうのイルカは、トンボ返りをうっていました。そうかと思うと、大きなクジラが、鼻の穴から水を吹きあげていました。そうすると、まわりに、何百ものふんすいができたように見えました。

今度は、五番めのお姫さまの番になりました。お誕生日が、ちょうど冬の最中でしたから、このお姫さまは、おねえさまたちとはちがったものを見ました。海は、すっかりみどり色になっていて、まわりには大きな氷山が浮んでいました。その氷山の一つ一つが、真珠のようにかがやいて、人間のたてた教会の塔よりも、ずっとずっと大きかったと、お姫さまは話しました。おまけに、そういう氷山は、世にもふしぎな形をしていて、ダイヤモンドのようにキラキラかがやいていました。

お姫さまは、いちばん大きな氷山の一つに、腰をおろしました。船の人たちは、お姫さまが、氷山の上にすわって、長い髪かみの毛を風になびかせているのを見ると、びっくりして、向きをかえて行つてしまいました。

やがて、日がくれかかると、空は雲でおおわれました。いなくまがピカピカ光り、かみなりがゴロゴロ鳴りだしました。黒い海の波に、大きな氷山が、高く持ちあげられ、赤いなくまに照らして、キラキラ光りました。どの船も、みんな帆ほをおろして、船の中の人たちは、おそろしさにふるえています。お姫さまは、波のあいだをただよう氷山の上こに静かに腰をおろして、青いなくまが、ジグザグに、ピカピカ

光る海の面にきらめき落ちるのをながめていました。

おねえさまたちは、はじめて海の底から水の上に浮びあがったとき、新しいものを見たり、美しいものを目にして、みんな夢中むちゆうになってよろこんでいました。けれども、一人前の娘むすめになって、好きなときに、いつでも行けるようになると、いままではど心をひかれなくなりしました。それどころか、かえって、うちが恋こいしくなりました。一月ひとつきもたつと、海の底がやっぱりどこよりも美しく、うちにいるのがいちばんいいと、口々に言うようになりました。

五人のおねえさまたちは、夕方になると、よく手をつないでは、ならんで、海の上に浮びあがっていききました。

お姫さまたちは、どんな人間よりも、美しい、きれいな声をもっていました。あらしがおこって、船が沈しずみそうになると、その船の前をおよぎながら、それはそれはきれいな声で、海の底がどんなに美しいかをうたいました。そして、船の人たちに、海の底へ沈んでいくのをこわがらないでください、とたのむのでした。けれども、船の人たちには、お姫さまたちのうたう言葉がわかりません。あらしの音だらうぐらいに思いました。それから、その人たちは、美しい海の底を見ることもできません。それもそのはず、船が沈めば、人間はおぼれて、死んでしまうのです。そうしてはじめて、人魚の王さまのお城に行くのですからね。

こうして、夕方、おねえさまたちが、手をとりあって、海の上に浮びあがって行ってしまふと、いちばん下の小さなお姫さまは、たったひとり取り取りのこされて、おねえさまたちのあとを見送るのでした。そんなときには、さびしくって、泣

きたいような気がしました。けれども、人魚のお姫さまには、^{なみだ}涙というものがありません。涙がないだけに、もっと苦しい、つらい思いをしなければなりませんでした。

「ああ、あたしも、早く十五になれないかしら」と、お姫さまは言いました。「海の上の世界と、そこに家をたてて住んでいるという人間が、きつと好きになれそうだから」

とうとう、お姫さまも十五になりました。

「もう、おまえも大きくなりました」と、お姫さまにとつてはおばあさまにあたる、王さまのおかあさまが言いました。「さあ、おいで。おけしゅうをしてあげましょう。おねえさんたちにしてやったようにね」

こう言つて、おばあさまは、白ユリの花輪をお姫さまの髪かみにつけてやりました。見ると、その花びらは、一つ一つが、真珠しんじゆを半分にしたものでした。それから、お姫さまが高い身分であることをあらわすために、お姫さまのしっぽを八つの大きな力キにはさませました。

「あら、いたいっ！」と、人魚のお姫さまは言いました。

「りっぱになるのには、すこしくらい、がまんをしなくてはいいけませんよ」と、おばあさまが言いました。

お姫さまは、そんなおかざりなどは、どんなにはらい落してしまいましたかっかかれませぬ。重たい花輪なども、取つてしまいたいと思ひました。そんなものよりも、お庭に咲さいている赤い花のほうが、お姫さまにはずっとよく似合うにきまっています。でも、いまさら、そうしようとも思ひませぬ。

「行ってまいります」と、お姫さまは言つて、すきとおつたあわのように、かるやかに、水の中を上へ上へとのぼつてい

きました。

お姫さまが海の上に頭を出したとき、ちょうどお日さまが沈しずみました。けれども、雲という雲は、まだバラ色に、あるいは金色に照りはえていました。うすモモ色の空には、よいの明みよ星しやうが明るく、美しく光つていました。風はおだやかで、空気はすがすがしく、海の面おもては鏡のように静かでした。

むこうのほうに、三本マストの大きな船が浮んでいました。風がすこしもないので、帆ほは、たった一つしかあげていません。そのまわりの綱つな具ぐや、帆ほげたの上には、水夫たちがすわっていました。船からは、音楽と歌も聞えてきます。そのうちに、夕やみがこくなつてくると、色とりどりの、何百ものちようちんに、火がともされました。そのようすは、まるで万国旗が風にひらひらと、ひるがえつていようでした。

人魚のお姫さまは、船室の窓のすぐそばまでおよいでいきましました。からだに波に持ちあげられるたびに、すきとおつた窓ガラスを通して、中のようすをのぞくことができました。そこには、きれいに着かざつた人たちが、大ぜいいました。なかでも美しく見えたのは、大きな黒い目をした、若い王子でした。年のころは十六ぐらいでしょう。それより上には見えません。きょうは、この王子の誕生たんじゆうび日ひだったのです。それで、こんなにぎやかに、お祝いの会が開かれています。水夫たちが、甲板かんばんで踊おどりをはじめました。そこへ、若い王子が出てきますと、花火が百いじょうも空高く打ちあげられました。そのため、あたりが、ま昼のように明るくなりました。

人魚のお姫さまは、びっくりきょううてんして、水の中にも

ぐりこみました。でも、すぐまた、頭を出してみました。と、どうでしょう。空のお星さまが、みんな、自分のほうへ落ちてくるようです。お姫さまは、こういう花火というものをまだ一度も見たことがなかったのです。大きなお日さまが、いくつもいくつも、シュツ、シュツと音をたてながら、まわりました。すばらしい火のさかなが、青い空に飛びあがりましました。そうしたすべてのありさまが、すみきった、静かな海の面にうつりました。

船の上は、あかあかと照らし出されました。人間の姿はもちろんのこと、どんなに細い帆づなでも、一本一本をはっきりと見わたることができました。ああ、それにしても、若い王子は、なんとという美しい方でしょう！ 王子は、にこにこしながら、人々とあくしゅしていました。そのあいだも、このはなやかな夜空に、音楽はたえず鳴りひびいていました。

夜はふけました。それでも、人魚のお姫さまは、船と、美しい王子から、目をはずすことができませんでした。もう今は、色とりどりのちょうちんの火は消えて、花火も空に上がらなくなりました。お祝いのための大砲たいほうの音もとどろきません。けれども、深い海の底では、低くブツブツといううなりがしていました。お姫さまは、あいかわらず、水の上に浮びながら、波のまにまにゆられて、船室の中をのぞいていました。

ところが、船は、きゆうに、今までよりも速く走りだしました。帆が一つ、また一つと、張られました。気がついてみると、波は山のように高くなり、空には黒雲が集まってきて、遠くのほうでは、いわずがピカピカ光っているではありません。

せんか。ああ、おそろしいあらしがやってきそうです。このありさまに、水夫たちはまた帆をおろしました。大きな船は、あれくるう海の上を、ゆれながらも、矢のように速くつき進んでいます。波は、大きな山のように、黒々ともりあがって、今にもマストをつきたおそうとします。

船は、まるでハクチョウのように、高い波の谷間に沈むかと思うと、すぐまた、塔とうのような波のてっぺんに持ちあげられました。人魚のお姫さまには、おもしろい航海のように思われました。ところが、船の人たちにしてみれば、それどころではありません。船は、うめくような音をたてて、ミシミシときしりはじめました。大波が船にはげしくぶつかると、そのいきおいで、あつい船板がまがり、海の水が流れこみましました。マストは、アシかなにかのように、まんなかから、ポキッと折れてしまいました。船は横にかたむいて、水がどつどつと船倉へ流れこんできました。

船の中の人たちの命が、あぶなくなりました。人魚のお姫さまも、ようやく、そのことに気がつきました。でも、そうは思っても、お姫さま自身が、海の上をただよっている、船の材木や板切れに、気をつけなくてはなりません。

そのとき、きゆうに、あたりがまっ暗になって、なに一つ見えなくなりました。と、思うまもなく、また、いな光りがして、ぱっと明るくなりました。船の上のものが、またみんな見えませんでした。だれもかれもが、大さわぎをしています。お姫さまは、その中で、あの若い王子の姿をさがしました。と、船がまっ二つにさけたとたん、深い海の中へ、王子の落ちこんでいくのが見えました。

その瞬間、お姫さまは、すっかりうれしくなりました。王子が、海の底の、自分のそばへくるものと思つたからです。けれども、すぐまた、人間は水の中では生きていられない、ということをお願いしました。だから、この王子も死ななければ、おとうさまのお城へは降りていくことができないのだと気がつきました。ああ、王子さまを死なせてはいけない！ どうしても死なせてはならない！ そう思うと、お姫さまは、自分の身の危険も忘れて、海の上をただよっている材木や板のあいだをかきわけて、王子のほうへおよいでいきました。もし、その材木の一つでも、からだにあたれば、お姫さまは押しつぶされてしまうのです。

お姫さまは、水の中へ深くもぐったり、大きな波のあいだに浮びあがつたりしているうちに、とうとう、若い王子のところへおよぎつきました。王子は、もうこれ以上あれくるう海の中をおよぐことはできなくなっていました。手足はつかれきつて、もう、しびれはじめていたのです。美しい目は、しつかりとじていました。もしもこのとき、人魚のお姫さまがきてくれなかったなら、きっと死んでしまったことでしょう。お姫さまは、王子の頭を水の上に持ちあげて、どこともなく、波に身をまかせて、ただよっていきました。

明けがた近く、あらしはすぎさりしました。船はかげも形もなく、あたりには、切れはし一つ見えません。お日さまがあかかとのぼって、海の面をキラキラと照らしました。すると、気のせいか、王子の頬にも、血の気がさしてきたように思われました。でも、やっぱり、目はかたくじたままでした。人魚のお姫さまは、王子の高い、美しいひたいにキスを

して、ぬれた髪の毛をなであげてやりました。見れば、王子は、どことなく、海の底の小さな花壇にある、あの大理石の像に似ているような気がします。お姫さまは、もう一度キスをして、王子さまが、どうか生きていてくれますように、と、心の中で祈りました。

やがて、むこうのほうに陸地が見えてきました。高い、青い山々のいただきには、ちょうど、ハクチヨウが寝ているよくなかつこうで、まっ白い雪がキラキラ光っていました。下の海へには、美しいみどりの森があつて、その前に一つの建物が立っていました。それは教会なのか修道院なのか、お姫さまにはよくわかりませんでした。見ると、庭にはレモンやオレンジの木が生えていて、門の前には高いシュロの木が立っています。海は、ここで小さな入り江になっていました。入り江の中はとても静かでしたが、おくの岩のところまでたいてい深くなっていました。その岩のあたりでは、白いこまかい砂が波にあらわれていました。

人魚のお姫さまは、美しい王子をだいて、そこへおよいでいきました。そして、王子を砂の上に寝かせましたが、そのときも王子の頭を高くして、暖かいお日さまの光がよくあたるように、気をつけてあげました。

そのとき、大きな白い建物の中で、鐘が鳴りました。そして、若い娘たちが大ぜい、庭から出てきました。それを見ると、人魚のお姫さまは、そこから離れて、二つ三つ海の面につき出ている、大きな岩のかげまでおよいでいきました。そこで、海のを髪や胸のかげまでおよいでいきました。それがないようにしてから、この気の毒な王子のそばに、どんな

人がやってくるか、じっと見ていました。

まもなく、ひとりの若い娘が歩いてきました。娘は、王子を見ると、たいそうびっくりしたようでした。でも、すぐにもどって行って、ほかの人たちを呼んできました。人魚のお姫さまが、なおも目を離さずに見ていますと、王子は、とうとう気がついて、まわりにいる人たちにほほえみかけました。

けれども、命をたすけてくれた人魚のお姫さまのほうへは、ほほえんでも見せませんでした。考えてみれば、むりもありません。お姫さまに命をたすけてもらったことなどは、夢にも知らないのですからね。でも、お姫さまは、たいそう悲しくなりました。まもなく、王子が大きな建物の中にはこぼれていってしまったと、人魚のお姫さまは、悲しみながら水の中へしずんで、おとうさまのお城へもどっていききました。

このお姫さまは、もともと、もの静かで、考え深いたちでしたが、今では、それがもつともつとひどくなりました。

「ねえ、海の上で、どんなものを見てきたの？」と、おねえさまたちはしきりにたずねましたが、お姫さまはなんにも話しませんでした。

それから、幾晩も幾朝も、お姫さまは、王子と別れた海べに浮びあがっていききました。いつのまにか、庭の木の実が熟してもぎとられていくのを見ました。高い山々の雪が、とけていくのも見ました。それでも、王子の姿は見えませんが、そのたびに、お姫さまは、前よりもいっそう悲しくなっていて、うちへ帰って行くのでした。

いまのお姫さまにとっては、自分の小さな花壇の中にすわって、王子に似ている、あの美しい大理石の像を腕にだくこ

とだけが、たった一つのなぐさめとなりました。もう、お姫さまは、花の手入れもしてやりません。ですから、草花は、まるで荒れ野のように、道の上までぼうぼうとおいしげってしまいました。おまけに、長いくきや葉が、木の枝とからみあっているものですから、あたりはまっ暗になりました。

とうとう、人魚のお姫さまは、もうこれ以上がまんができなくなりしました。自分の苦しい気持をおねえさまのひとりに、そっと打ちあげました。すると、すぐに、ほかのおねえさまたちにも知れてしまいました。でも、この話を知っているのは、おねえさまたちと、ほかに、二、三人の人魚の娘たちだけでした。みんなは、ごくなかのいい友だちにしか話さなかつたからです。ところが、ぐうぜんなことに、その友だちの中に、王子のことを知っている娘がいました。その娘も、いつか船の上で開かれていた、王子の誕生日のお祝いを見ていたのでした。そして、うれしいことに、王子がどこの国の人で、その国はどこにあるのかということまで、知っていました。

「さあ、行きましよう」と、ほかのお姫さまたちが言いました。そして、みんなで、腕と肩とを組んで、長く一列にならんで、王子のお城のあるという海べへ浮びあがっていききました。

そのお城は、つやつやした、うす黄色の石で作られています。大きな大理石の階段がいくつもあって、その一つは海の中まで降りていました。上には、金色の、すばらしいまる屋根がそびえていました。まる柱が建物のまわりをとりまいていましたが、その柱と柱のあいだには、ほんとうに生きて

いるのではないかと思われるような、大理石の像が立っていました。

高い窓のすきとおったガラスからは、中が見えました。ここには、たとえようもないくらいりっぱな広間がつづいていて、りっぱな絹のカーテンと、じゅうたんがかかっています。それに、かべというかべには、大きな絵がいくつもかざってあって、いくら見ても、あきないくらいでした。いちばん大きな広間のまんなかには、大きなふんすいが、サラサラと音をたてていました。そのしづきは高く飛びちって、ガラスばりのまる天井まで、届くほどでした。お日さまの光が、ガラスの天井からさしこんできて、水の上や、大きな水盤すいばんに浮うかんでいる美しい水草を、キラキラと照らしていました。

こうして、王子の住んでいるところがわかると、人魚のお姫ひめさまは、それからというものは、夕方から夜にかけて、何度も何度も、その海へへ浮びあがっていききました。そして、ほかの人たちには、とてもまねのできないくらい、陸の近くまでおよいできました。それどころか、しまいには、せまい水路をさかのぼって、美しい大理石のテラスの下まで行ききました。テラスのかけは、水の面に長くうつつていました。

人魚のお姫さまは、そのテラスの下に身をかくして、若い王子を見あげました。王子のほうでは、ほかにだれかいようとは夢ゆめにも知らず、ただひとり、明るいお月さまの光をあびて立っていました。

お姫さまは、王子が音楽をかなでながら、旗をひらひらとなびかせた、美しいボートに乗って、夕方海に出ていくのを、何度もながめました。お姫さまは、みどりのアシのあいだか

ら、そっとのぞいていたのでした。風がそよそよと吹ふいてきて、お姫さまのしろがね色の、長いベールをひらひらさせると、それを見た人は、ハクチョウがつばさをひろげたのさうと思いました。

漁師りしたちが、晩にたいまつをともし、海の上で漁をしながら、若い王子のうわさをしてほめているようなことが、よくありました。お姫さまは、それを聞いたたびに、この王子が、いつかあれくるう波にもまれて、いまにも死にかかっていたとき、自分が、その命をたすけてあげたのだと思うと、うれしくなりません。そして、王子の頭が、自分の胸の上にもたれていたことや、王子のひたいに、心をこめてキスをしたことなどを思い出したのでした。でも、王子のほうでは、そんなことはなんにも知らないのです。お姫さまのことなどは、夢にも思ってみたことがありませんでした。

お姫さまは、だんだんに人間をしたうようになりました。ますます、人間の世界へのぼって行って、仲間にはいりたいと思うようになりました。人間の世界は、海の人魚の世界よりも、ずっとずっと大きいように思われました。人間は、海の上を船に乗って走ることができません。雲の上までそびえている、高い山にもものぼることができません。それに、人間の住んでいる陸地には、森や畑があつて、それが、お姫さまの目の届かないほど遠くまで、どこまでもどこまでもひろがっているのです。

お姫さまの知りたいと思うことは、まだまだたくさんありました。おねえさまたちにきいてみても、だれもみんな答えてくれることはできません。そこで、お姫さまは、お年をと

ったおばあさまにたずねてみました。おばあさまなら、上の世界のことをよく知っていましたから。上の世界というのは、おばあさまが海の上の陸地につけた、なかなかうまい名前だったのです。

「人間というものは、おぼれて死ななければ、いつまでも生きていられるんでしょうか？ 海の底のあたしたちのように、死ぬことはないんですか？」と、人魚のお姫さまはたずねました。

「いいえ、おまえ、人間だって死にますよ」と、おばあさまは言いました。「それに、人間の一生は、かえって、わたしたちの一生よりも短いんだよ。わたしたちは、三百年も生きていられるね。けれども、死んでしまえば、わたしたちはあわになって、海の面に浮いて出てしまうから、海の底のなつかしい人たちのところで、お墓を作ってもらうことができないんだよ。わたしたちは、いつまでたっても、死ぬことのない魂たましいというものなければ、もう一度生れかわるといふこともない。わたしたちは、あのみどりの色をした、アシに似ているんだよ。ほら、アシは、一度切りとられれば、もう二度とみどりの葉を出すことができないだろう。

ところが、人間には、いつまでも死なない魂というものがあってね。からだが生んで土になつたあとまでも、それは生きのこっているんだよ。そして、その魂は、すんだ空気の中を、キラキラ光っている、きれいなお星さまのところまで、のぼっていくんだよ。わたしたちが、海の上に浮びあがって、人間の国を見るように、人間の魂は、わたしたちがけつして見ることでできない、美しいところへのぼっていくんだよ。

そこは天国といって、人間にとっても、前から知ることのできない世界なんだがね」

「どうして、あたしたちには、いつまでたっても死なないという魂がさずかりませんか？」と、人魚のお姫さまは、悲しそうにたずねるのでした。「あたしの生きていられる、何百年という年を、すっかりお返ししてもいいから、そのかわり、たった一日だけでも、人間になりたいわ。そうして、その天国とかいうところへのぼっていきたいわ」

「そんなことを考えちゃいけないよ」と、おばあさまが言いました。「わたしたちは、あの上の世界の人間よりも、ずっとしあわせなんだからね」

「だって、それなら、あたしは死んでしまうと、あわになつて、海の上をただよわなくてはならないでしょう。そうなれば、もう、波の音楽も聞かれないでしょうし、きれいなお花や、まっかなお日さまも見られないでしょう。ああ、どうにかして、いつまでも死なないという、その魂をさずかることはできないものでしょうか？」

「そんなことをいつてもねえ」と、おばあさまが言いました。「でも、たった一つ、こういうことがあるよ。人間の中のだけれかが、おまえを好きになって、それこそ、おとうさんよりもおおかあさんよりも、おまえのほうが好きになるんだね。心の底からおまえを愛するようになって、牧師さまにお願いをする。すると、牧師さまが、その人の右手をおまえの右手に置きながら、この世でもあの世でも、いついつまでも、ま心はかわりませんと、かたいちかいをたてさせてくださる。そうやってはじめて、その人の魂が、おまえのからだの中につ

たわって、おまえも人間の幸福を分けてもらえようになるということだよ。その人は、おまえに魂を分けてくれても、自分の魂は、ちゃんと、もとのように持っているんだって。

でも、そんなことは、起るはずがない。だって、考えてもごらん。この海の底では、美しいと思われているものでも、たとえばだね、おまえの持っている、そのさかなのしっぽにしたって、陸の上にいる人間の目には、みにくく見えるんだからね。人間には、そのね、う、ちがわからないんだよ。だから、そのかわりに、かっこうのわるい、二本のつつかい棒を持たなければならぬんだよ。人間は、うまく言いつくろうために、そのつつかい棒のことを、足なんて言っているけどね」それを聞くと、人魚のお姫さまは、ほっとため息をついて、悲しそうに自分のさかなのしっぽをながめました。

「さあさあ、ゆかいになろうよ」と、おばあさまが言いました。「はねたり踊ったりして、わたしたちの生きていられる三百年のあいだを、楽しく暮そうよ。三百年といえ、ずいぶん長い年月じゃないの。それからあとは、思いのこすこともなく、ゆつくり休むことができるというものさ。そうそう、今夜は、舞踏会を開こうね」

その晩の舞踏会は、陸の上ではとても見られない、美しい、はなやかなものでした。

大きな部屋のかべや天井は、あついけれども、よくすきとおるガラスできていました。広間のどこを見まわしても、かべというかべには、バラ色や草色の大きな貝がらが、二、三百も列を作ってならんでいました。そして、その貝がらの一つ一つに、青いほのおの燃えている明りがともっていて、

広間じゅうを明るく照らしていました。そのうえ、かべをとおして、外のほうまでさしていましたから、まわりの海は青い光で、明るく照らされていました。

かぞえきれないほどたくさんさかなたちが、ガラスのかべのほうにむかっておよいでくるのが見えました。まっかなうろこをキラキラさせているさかなもあれば、金色や銀色のうろこをきらめかせているのもありました。

広間のまんなかを、はばの広い流れが一すじ、サラサラと音をたてて流れていました。その流れの上では、人魚の男や女たちが、美しい人魚の歌をうたいながら、それに合せて踊っていました。そんな美しい声は、とても地上の人間にはありません。わけても、いちばん下のお姫さまは、だれよりも、美しい声でうたいました。みんなは、手をたたいてほめそやしました。お姫さまも、心の中ではうれしく思いました。陸の上にも、海の中にも、自分より美しい声を持っているものがないことを思ったからでした。けれども、すぐまた、上の世界のことを思うのでした。あの美しい王子のこと、王子の持っているような、死ぬことのない魂が、自分にはないという悲しみを、どうしても忘れることができませんでした。

それを思うと、お姫さまはたまらなくなつて、おとうさまのお城からこっそり抜けだしました。みんなは、お城の中にぎやかにうたったり、踊ったりしているというのに、お姫さまだけは、たったひとり、自分の小さな花壇の中に、悲しみに沈んですわっていました。

そのとき、ふと、角ぶえのひびきが、水の中をつたわって聞えてきました。お姫さまは、はっとして、思いました。

「きつと、いま、あのかたが海の上を、船に乗ってお通りになっているのだわ。おとうさまよりもおかあさまよりもっと好きなあのかたが。あたしがいつも思っているあのかたが。あのかたのお手に、あたしの一生のしあわせをおまかせしてもいいわ。あのかたと死ぬことのない魂とが、あたしのもことになるのなら、どんなことでもやってみるわ。おねえさまたちがおとうさまのお城の中で踊っているあいだに、魔法使いのあばあさんのところへ行ってみよう。あの魔法使いは、今まではこわくてならなかったけど、でも、きつといい知恵をかして、助けてくれるわ」

そこで、人魚のお姫さまは、庭から出て、ゴーゴーとすさまじい音をたてている、うずまきのほうへ行きましました。魔法使いは、このうずまきのむこうに住んでいるのです。

人魚のお姫さまは、この道をまだ一度も通ったことがありませんでした。そこには、花も咲いていなければ、海草も生えていません。ただ、なんにもない、灰色の砂地があるばかりです。それが、うずのまいてるところまでひろがっていました。そこでは、海の水がゴーゴーと音をたてて、水車のようにうずをまいていました。いったん、その中にまきこまれたが最後、どんなものでも、深い底のほうへひきずりこまれてしまうのです。どんなものをも、粉々にくだいてしまおう、このうずのまんなかを通りぬけていかなければ、魔法使いの国へは行くことができないのです。おまけに、そこまで行くのには、ずいぶん長いあいだ、ブクブクとあわのたっている、あついでろの上を歩くほかには道がありません。

このどろのところを、魔法使いは、どろ沼と言っていました

た。そのむこうに、ふしぎな森があつて、そのまんなかにも魔法使いの家があるのです。

森の中の木やぶは、どれもこれも、はんぶんは動物で、はんぶんは植物のポリプでした。そのありさまは、ちょうど百の頭を持ったヘビが、地から生え出ているようでした。枝はといえば、みんな、ねばねばした長い腕で、まるで、ミミズのようにまがりくねる指を持っていました。そして、根もことから、いちばん先のはしまで、一節一節を動かすことができました。こうしていて、水の中で何かをつかまえようものなら、それがどんなものであろうと、しっかりとまきついて、二度とはなしはしないのです。

人魚のお姫さまは、ここまでやってくると、すっかりこわくなって、立ちすくみました。あまりのおそろしさに、胸はどきどきしています。引きかえそうかとも思いましたが、王子のことや、人間の魂のことなどを思つて、また、勇気をふるいおこしました。そこで、まず、ほどけた長い髪の毛を、頭にしっかりと巻きつけて、ポリプにつかまらないようにしました。それから、両手を胸の上にかさねて、さかなが水の中をすいすいとおよぐように、気味のわるいポリプのあいだをすりぬけていきました。そのあいだじゅう、ポリプたちは、腕と指とをお姫さまのほうへ、うねうねと伸ばしていました。

見れば、どのポリプも、つかまえたものを、何百という小さな腕でぎゅつとしめつけているのです。まるで、がんじょうな鉄のひもでもしめつけているようなくあいに。海で死んで、底深く沈んできた人間が、白骨となって、ポリプの腕のあいだからのぞいていました。船のかいや、箱もしめつけ

られていました。そうかと思うと、陸の動物の骨も見えました。ほかにもまだ、小さな人魚の娘がひとりつかまって、しめ殺されていました。そのありさまが、お姫さまには、この上もなくおそろしいものに思われました。

やがて、お姫さまは、森の中の、どろどろした広いところへきました。そこには、あぶらぎった、大きなウミヘビがとぐろをまいて、気味のわるい、うす黄色の腹を見せていました。広場のまんなかに、一けんの家が立っていましたが、それは、船が沈んだときに死んだ人間の白骨で、作ったものでした。

その家の中に、魔法使いがいたのです。魔法使いは、ちょうど、人間が小さなカナリアにおさとうをなめさせてやるよくなぐあいに、自分の口から、ヒキガエルにえさをやっているところでした。そして、あの見るもいやらしい、ふとつたウミヘビを、魔法使いは、「かわいいひなっこや」と呼んで、だぶだぶした大きな胸の上をはいずりまわらせていました。

「おまえさんがなんできたのか、わたしにや、ちゃんとわかっているよ」と、魔法使いの女は言いました。「ばかなことはやめておおき。わがままを押し通すと、今にふしあわせになるよ、きれいなお姫さん。おまえさんは、さかなのしっぽを取っちゃって、そのかわり、人間みたいにな、歩くときに使う、二本のつかいかい棒がほしいんだろ。そうして、若い王子がおまえさんを好きになって、おまえさんは、王子と死ぬことのない魂を手に入れようってつもりだね」

こう言って、魔法使いは、ぞっとするような高い声で笑いました。そのひょうしに、ヒキガエルとウミヘビは下にころ

がり落ちて、あたりをはいずりまわりました。

「だが、おまえさんは、いいときにきたんだよ」と、魔法使いは言いました。

「あしたになって、おてんとさまがのぼっちまえば、あと一年たたないことにな、おまえさんを助けてやるわけにはいかなかったんだよ。

どれ、ひとつ、飲みぐすりをこしらえてやろうかね。おまえさんは、それを持って、おてんとさまののぼらないうちに、陸地におよいでいくんだよ。それから、岸にあがって、くすりをお飲み。そうすりゃ、おまえさんのしっぽはちぢんでしまつて、足つてものになるよ。ほら、人間がきれいな足といつて、あれさ。だが、そりゃあ痛いなのなんのつて。まるで、するどい剣でつきさされるようだよ。

そのかわり、おまえさんを見れば、どんな人間でも、ああ、今までに見たことのないきれいな娘だ、と言うにきまつてるよ。おまえさんの歩きかたはじょうひんで、軽そうで、どんな踊り子だって、おまえさんみたいにはいかないさ。だが、歩けば、ひとあしごとに、するどいナイフをふんで、血が出るような思いをするだろうよ。どうだい。それでも、がまんができるというのなら、力をかしてやってもいいよ」

「はい、お願いします」と、人魚のお姫さまは、ふるえる声で言いました。王子のことを思い、死なない魂を手に入れることを、じっと思っていました。

「だが、これだけは忘れちゃいけないよ」と、魔法使いが言いました。「一度、人間の姿になっちまえば、もう二度と、人魚の娘にもどることはできないんだよ。二度と水の中をくぐ

って、ねえさんたちや、おとうさんのお城へ、もどってはこられないんだよ。それにだね、王子が、おとうさんやおかあさんのことを忘れてしまうほど、おまえさんを好きになって、心の底から、おまえさんのことばかり思うようになり、牧師さんにたのんで、おまえさんたちふたりの手をにぎらせてもらって、夫婦ふうふにしてもらわなきゃ、死なない魂は、おまえさんの手には、はいりっこないんだよ。もしも王子が、だれかほかの女とでも結婚けっこんしようもんなら、そのつぎの朝には、おまえさんの心臓ははれつして、おまえさんは、水の上のあわとなってしまうんだよ」

「それでもかまいません」と、人魚のお姫さまは言いました。けれども、顔の色は、死人のように青ざめました。

「それから、わたしにはらう代金のことも、忘れちゃこまるよ」と、魔法使いは言いました。「なにしろ、わたしのほしいつてのは、ちょっとやそつとのものじゃないからね。おまえさんは、この海の底のだれよりもきれいな声を持っている。その声で王子の心をまよわそうってつもりなんだろうが、じつはその声を、わたしやもらいたいのです。」

だいじな飲みぐすりをやるんだから、そのかわりに、おまえさんの持っているいちばんいいものを、もらいたいってわけだよ。なにしろ、飲みぐすりが、もろ刃はのつるぎのようによくきくようにするためにや、わたしやあ、自分の血を、その中へまぜこまなきゃならないんだからね」

「でも、あなたに、この声をあげてしまったら、あたしには、いったい、何がのこるんでしょう？」と、人魚のお姫さまが言いました。

「おまえさんにや、きれいな姿と、軽い、じょうひんな歩きかたと、ものをいう目があるじゃないか。それだけありや、人間の心をまよわすことができるってもんさ。」

「おや、おまえさん、勇気がなくなっただかい？ さあ、さ、その小さな舌をお出し。くすりのお代に切らせてもらうよ。そのかわり、よくきくくすりはやるからね」

「いいわ、どうぞ」と、人魚のお姫さまは言いました。

魔法使いは、なべを火にかけて、魔法のくすりを作りにかかりました。

「まず、きれいにしてとね」

魔法使いは、こう言って、へびをくるくると結んで、それで、なべをみぎました。それがすむと、今度は、自分の胸をひっかいて、黒い血をなべの中にたらしめました。すると、そこから湯気が、もうもうとたちのぼって、なんともいえない、気味のわるい形になりました。

そのようすは、まったくおそろしくて、ぞっとするほどでした。魔法使いは、ひっきりなしに、なべの中に新しいものを入れました。やがて、それがよくにたつと、まるで、ワニの鳴くような音をたてました。こうして、とうとう、くすりができあがりしました。見ただけでは、まるで、きれいにすんだ水のようにでした。

「さてと、できたよ」と、魔法使いは言いました。そして、人魚のお姫さまの舌を切りとりました。これで、お姫さまはおしになってしまいました。もうこれからは、歌もうたえませんし、ものを言うこともできません。

「おまえさんが、これから森の中を帰っていくとき、ポリプ

どもにつかまりそうになつたら」と、魔法使いは言いました。

「たった一たらしでいいから、この飲みぐすりをかけてやんなさい。そうすりゃ、やつらの腕うでや指は、みんな粉々に飛んじまうから」

でも、そんなことをするまでもありませんでした。ポリプたちは、お姫さまの手の中で、くすりがお星さまのようにキラキラ光っているのを見ると、はっとおそれて、からだをひっこめてしまいました。ですから、お姫さまは、なんの苦もなく、森もどろ沼ぬまも、はげしいうずまきの中を通りぬけていきました。

おとうさまのお城が見えてきました。大きな部屋の明りは、もう消えています。みんなは、きつと寝ねているのにちがいません。お姫さまは、みんなのところへ行こうとはしませんでした。今は、ものを言うこともできませんし、それに、きょうかぎり、一生のお別れをしようと思っているのです。お姫さまの心は、悲しみのためにはりさけそうでした。そつとお庭の中にはいって行って、おねえさまたちの花壇かたんから、一つずつ花をつみとりました。そして、お城のほうへ、何度も何度もキスを投げてから、青い海の中を上へ上へとのぼっていきました。

まだ、お日さまののぼらないころ、人魚のお姫さまは、王子のお城を見あげながら、りっぱな大理石の階段の上ののぼりました。お月さまが、美しく、明るくかがやいていました。人魚のお姫さまは、燃えるように強いくすりを飲みました。すると、もろ刃のつるぎで、かぼそいからだをつきさされたような気がしました。たちまち、気が遠くなって、死んだよ

うにその場にたおれました。

やがて、お日さまがキラキラと海の面おもてを照らしました。人魚のお姫さまはようやく気がつきましたが、はげしい痛みをからだに感じました。目をあげて見れば、すぐ前に、あの美しい、若い王子が立っています。王子は、黒い目で、じつと、お姫さまを見つめていました。お姫さまは、思わず、その目をふせました。と、どうでしょう。さかなのしっぽは、いつのまにか消えてしまつて、かわいらしい人間の娘しか持っていないような、世にも美しい、小さな白い足が生はえているではありませんか。けれども、お姫さまは、なんにも着ていません。はだかでしたので、ゆたかな長い髪かみの毛で、からだをかくしました。

「あなたは、どういうかたですか？ どうしてここへきたのですか？」と、王子はたずねました。

お姫さまは、青い目で、いかにもやさしそうに、でも、たいそう悲しげに、王子を見つめました。なぜって、お姫さまは、口をきくことができないのですから。王子は、お姫さまの手をとつて、お城の中へ連れていきました。お姫さまは、ひとあし歩きたびごとに、魔法使いが前に言つたとおり、とがった針はりか、するどいナイフの上をふんでいるような思いがしました。けれども、このくらしいの苦しみはよろこんでがまんしました。王子に手を引かれながら、お姫さまは、水のあわかと思われるほど、たいそうかるやかに、のぼっていきました。その軽々とした、かわいらしいお姫さまの歩きかたに、王子もほかの人たちも、ただただおどろいていました。

お姫さまは、絹やモスリンの、りっぱな着物をいただきま

した。お城の中で、お姫さまが、だれよりもいちばんきれいでした。でも、かわいそうに、おしだったのです。歌をうたうことも、ものを言うこともできません。絹と金とで着かざった、美しい女のどれいたちが出てきて、王子と、王子のご両親の王さま、お妃さまの前で、歌をうたいました。中のひとりが、ほかのものよりもじょうずにうたいました。すると、王子は手をたたいて、その女のほうへほほえみかけました。それを見ると、人魚のお姫さまはとても悲しくなりました。自分だったら、もっともつとよい声でうたうことができたのに、と思ったのです。そして、心の中で言いました。

「ああ、王子さま、あなたのおそばにいたいために、あたしは、永久に声をすててしまったのです。せめて、それだけでも、わかってくださったら」

やがて、女のどれいたちは、すばらしい音楽に合わせて、今度は、美しく、かるやかに踊りました。人魚のお姫さまも、美しい白い腕をあげて、つま先で立ちながら、床の上をすべるように、軽々と踊りました。そんなにみごとに踊ったものは、だれもありません。踊って動いたびごとに、お姫さまの美しさが、いよいよ加わりました。その目は心の中の思いをあらわして、どれいたちの歌よりも、強く強く人の心を打ちました。

人々は、みんな、うっとりとして見とれていました。なかでも、王子のよろこびかたはたいへんなもので、「かわいいすて子さ〜ん」と呼びました。お姫さまは、足が床にさわるたびごとに、するどいナイフの上をふむような思いをしました。それでも、じつとがまんして、踊りつづけました。

王子はお姫さまに、これからは、いつも自分のそばにいるように、と言いました。そのうえ、お姫さまは、王子の部屋の前にある、ピロイドのふとんに寝てもいい、というおゆるしもいただきました。

王子は、お姫さまのために、男の着物を作らせて、ウマに乗っていくおともをさせました。ふたりは、かおりのよい森の中を通っていきました。みどりの枝が肩にふれたり、小さな鳥が若葉のかけでさえずつたりしていました。

お姫さまは、王子といっしょに高い山にもぼりました。か弱い足からは、だれの目にもわかるくらい、血がにじみ出ましたが、それでも、お姫さまはただ笑って、どんどん王子のあとについていきました。とうとう、雲の上まで出ました。そこから見ると、下のほうを流れている雲は、遠くの国へ飛んでいく、鳥のむれのように見えました。

王子のお城で、ほかの人たちが夜になって寝てしまうと、お姫さまは、はばの広い大理石の階段をおりて、燃えるような足をつめたい海の水中にひたして、ひやしました。そんなときには、深い海の底にいる、なつかしい人たちのことが思い出されるのでした。

ある晩のこと、おねえさまたちが、手をつないで、海の上に出てきました。みんなは、波のまにまに浮びながら、ひどく悲しい歌をうたいました。お姫さまが、手まねきすると、おねえさまたちのほうでも、それに気がつきました。

「海の底ではね、あなたがいなくなつてから、みんな、とっても悲しんでいるのよ」と、おねえさまたちは話しました。それからというもの、おねえさまたちは、毎晩たずねて

きてくれました。ある晩などは、もう何年も海の上に出てきたことのない、お年よりのおばあさまと、頭にかんむりをかぶった、人魚の王さまの姿までも、ずっと遠くのほうに見えました。おばあさまもおとうさまも、お姫さまのほうへ手をさしのばしました。けれども、おねえさまたちのように、陸の近くまでこようとはしませんでした。

一日ごとに、王子は、お姫さまが好きになりました。とっても、王子は、おとなしい、かわいい子供をかわいがるように、お姫さまをかわいがっていたのです。ですから、お姫にしようなどは、夢にも思っていませんでした。ところが、お姫さまのほうでは、どうしても、王子のお妃にならなければなりません。さもなければ、死ぬことのない魂を、手に入れることができないのです。いや、それどころか、王子が結婚したつぎの朝には、海の上のあわとなってしまうのです。

王子が人魚のお姫さまを腕にだいて、美しいひたいにキスをする、お姫さまの目は、

「あたしが、だれよりもかわいいとは思いませんか？」と言っているように思われました。

「うん、おまえがいちばん好きだよ」と、王子は言いました。「だって、おまえは、だれよりもやさしい心を持っていて、ぼくにま心をつくしてくれているんだもの。それに、おまえは、ある若い娘さんに似ているんだよ。その娘さんには、いつか一度会ったことがあるけれど、きつともう、会うことはないだろう。」

ぼくが船に乗って、海に出たときのことだよ。乗っていた船は、あらしにあって、沈んだけれど、ぼくは波に打ちあげ

られて、岸べについた。見ると、その近くには修道院があって、若い娘さんが、何人もおつとめをしていた。そのうちのいちばん若い娘さんが、岸べに打ちあげられているぼくを見つけて、命を助けてくれたんだよ。そのとき、ぼくは、その娘さんの顔を、二度しか見なかった。でも、ぼくがこの世の中で、いちばん好きに思うのは、ただ、その娘さんだけなんだよ。

だけど、おまえを見てみると、とても、その娘さんによく似ている。だから、ぼくの心の中にある、その娘さんの姿も、押しつけられてしまいそうなくらいだよ。でも、その娘さんは、あの修道院に一生いる人だから、幸福の神さまが、かわりに、おまえをぼくによこしてくださったんだよ。これからは、どんなことがあっても、離れずにいよう」

「ああ、王子さまは、あたしが命を助けてあげたことをごぞんじないんだわ」と、人魚のお姫さまは心の中で思いました。「あたしが、海の上を、修道院のある森のところまで連れて行ってあげたのに。それから、あたしは、海のアワをかぶって、だれかこないかと思っていたんだわ。そうしたら、きれいな娘さんがきたんだわ。その娘さんを、王子さまは、あたしよりも好いていらっしやる」

人魚のお姫さまは、深いため息をつきました。けれども、泣くことはできませんでした。

「そのむすめさんは、一生修道院につかえているんだと、王子さまはおっしゃったわ。そうすると、この世の中へは出てこれないんだから、おふたりはもう会えないわけだわ。それにくらべれば、あたしは、こうしておそばにいて、毎日毎

日、お顔を見ている。あたしは、王子さまのお世話をしてあげよう。心から王子さまをおしたいしよう。そして、王子さまのためなら、この命もよろこんでささげよう」

ところが、そのうちに、王子は結婚することになりました。おとなりの国の王さまの美しい王女を、お妃にむかえるという、うわさがたちました。そのために、船もたいそう美しくかざりつけられました。王子は、となりの国を見るために、旅に出かけるのだと言われましたが、ほんとうは、その国の王女にお会いになるためだったのです。おともの人たちも、大ぜいついていくことになりました。でも、人魚のお姫さまは、頭をふって、ほほえみました。王子が心の中に考えていることは、だれよりもよく知っていたからです。

「ぼくは、旅に出なければならぬ」と、王子は、お姫さまに言いました。「美しい王女に会ってこなければならぬんだよ。おとうさまやおかあさまが、そうするようにとおっしゃるからね。しかし、その王女を、どうでもお嫁さんにして帰ってくるように、とはおっしゃってはいないよ。ぼくが、その王女を好きになんかなれるはずはない。だって、修道院で見た、あの美しい娘さんに似ているはずがないもの。あの娘さんに似ているのは、おまえだけだよ。ぼくが、いつかお姫さんええらばなければならぬとしたら、いっそのこと、おまえをええらぶよ。ものをいう目をした、口のきけないすて子のかわいいおまえをね」

こう言って、王子はお姫さまの赤い唇くちびるにキスをしました。そして、お姫さまの長い髪かみの毛をいじりながら、お姫さまの胸に頭をおしあてました。お姫さまの心は、人間のしあわせ

と、死ぬことのない魂たまとを、夢ゆめに見ているのでした。

「だけど、海はこわくないだろうね、口のきけないすて子さん」

おとなりの国へ出かける、りっぱな船の上に立ったとき、王子はお姫さまに、こう言いました。それから、王子は、あらしのこと、海の静かなときのこと、深いところにいるふしぎなさかなのこと、それから潜水夫せんすいぶが海の中で見る、めずらしいものことなどを、いろいろと話してやりました。お姫さまはほほえみながら、王子の話を聞いていました。だって、海の底のことなら、お姫さまはだれよりもよく知っていたのですから。

お月さまの明るい晩、かじとりだけが、かじのところ立っていました。ほかの人たちは、みんな、寝しずまっています。そのとき、お姫さまは船べりにすわって、すみきった水の中をじっと見つめていました。すると、おとうさまのお城が見えたような気がしました。お城のいちばん高いところには、なつかしいおばあさまが頭に銀のかんむりをかぶって、立っていました。おばあさまは、速い水の流れをとおして、船のほうをじっと見あげていました。

そのとき、おねえさまたちが、海の面おもてに浮うかびあがってきて、お姫さまを悲しそうに見つめながら、もうだめだというように、白い手をもみあわせました。

お姫さまは、おねえさまたちのほうへうなずいて、ほほえみながら、なにかもがうまくいっていることを話そうとしました。ところがそこへ、船のボーイが近づいてきましたので、おねえさまたちは、水の中へもぐってしまいました。で

すから、ボーイは、今なにか白いものを見たような気がしましたが、それはきつと、海のあわだつたろうと思いました。

あくる朝、船はおとなりの国の、美しい都にある港にはいりました。教会という教会の鐘が鳴りわたり、高い塔からは、ラッパが吹き鳴らされました。兵士たちは、ひるがえる旗を持ち、きらめく銃剣を持って、立ちならびました。

毎日毎日、宴会がもよおされ、舞踏会だの、いろいろの会が、つぎからつぎへと開かれました。それなのに、この国の王女は、まだ一度も姿を見せたことがありません。なんでも、ずっと遠くの、ある修道院で教育をうけて、王女にふさわしい、いろいろの勉強をしているということでした。とうとう、その王女が帰ってきました。

人魚のお姫さまは、その王女が、どんなに美しいかたか、早く見たいと思っていたのですが、見れば、なるほど、こんなに美しい姿の人は、いままでに見たことがない、というよりほかはありませんでした。はだは、きめがこまやかで、すきとおるような美しさでした。長い黒いまつげの奥には、ま心のこもった青い目が、にこやかにほほえんでいました。

「ああ、あなただ！ ぼくが死んだようになって、海べにたおれていたとき、ぼくの命を助けてくださったのは！」と、王子はさげんで、はずかしそうに、顔を赤くしている王女を腕にだきしめました。

それから、今度は、人魚のお姫さまにむかって、言いました。

「ああ、ぼくは、なんてしあわせなんだろう！ どんなに願っても、とてもかなえられないと思っていた夢が、かなえら

れたんだよ。おまえも、ぼくのしあわせをよろこんでくれるだろう。だれよりもいちばん、ぼくのことを思っていてくれたおまえだものね」

人魚のお姫さまは、王子の手にキスをしました。けれども、胸は今にもほりさけそうでした。むりもありません。王子が結婚すれば、そのあくる朝、お姫さまは死んで、海の上のあわとなってしまうのです。

教会という教会の鐘が、鳴りわたりました。お使いのものが、ウマに乗って町の中をかけめぐり、ご婚約のことを知らせました。どこの祭壇でも、りっぱな銀のランプに、よいかおりのする油が燃やされました。牧師さんたちが香炉をふりました。花嫁と花婿はたがいに手をとりあつて、僧正さまの祝福をうけました。

人魚のお姫さまは、絹と金とで着かざつて、花嫁の長いすそをささげていました。けれども、お祝いの音楽も、耳にはいりません。おごそかな儀式も、目にはうつりません。ただ、死んでからの、暗い暗いやみのことばかりを思っていました。この世でなくしてしまった、すべてのことを思っているのです。

その日の夕方、花嫁と花婿は船に乗りこみました。大砲がどろきわたり、たくさんの旗が、風にひるがえりました。船のまんなかには、金とむらさきの、りっぱなテントがはられて、このうえもなく美しいふとんがしかれました。ここで、ふたりが、静かな、すずしい一夜をすごすことになっていたのです。

帆は風をうけて、いっぱいにくらんでいました。船は、

すみきった海の上を、たいしてゆれもせず、軽々とすべっ
ていきました。

あたりが暗くなると、色とりどりのランプに火がともされ、
水夫たちは甲板かんぱんに出て、楽しそうに踊りはじめました。人魚
のお姫さまは、はじめて海の上に浮びあがった晩のことを思
い出さずにはいられませんでした。あの晩も、いま目の前に
見ているのと同じように、にぎやかによるこびさわいでいる
ありさまが、目にうつったのでした。お姫さまも、みんなの
仲間にはいつて、くるくる踊りまわりました。そのありさま
は、なにかに追いかけられて、身をひるがえしながら、軽々
と飛んでいくツバメのようでした。見ている人々は、みんな、
手をたたいてほめそやしました。お姫さまが、こんなにご
とに踊ったことは、今までにもありません。か弱い足は、す
るどいナイフでつきさされるようでしたが、いまはそれを感じ
ないほどに、心のきずは、もっともつと痛んでいるのでし
た。

お姫さまには、よくわかつているのです。今夜かぎりで、
王子の顔も見られません。この王子のために、お姫さまは家
族をすて、家をすてたのです。美しい声もあきらめたので
くる日もくる日も、かぎりない苦しみをがまんしてきたので
す。それなのに、王子のほうでは、そんなことは夢にも知ら
ないので。王子とおなじ空気をすうのも、深い海をながめ
るのも、星のきらめく夜空をあおぐのも、今夜かぎりとなり
ました。考えることのない、夢見ることのない、はてしなく
つづくやみの夜だけが、お姫さまを待っているのです。思
えば、お姫さまには魂がありません。得ようとしても、いま

となつては、手に入れることのできないお姫さまなのです。
船の上は、にぎやかなよろこびにみちあふれていました。
もう、ま夜中をすぎています。それでも、お姫さまは、ほほ
えみを浮べながら、踊りつづけるのでした。心の中では、た
だ死ぬことだけを思いながら。王子は美しい花嫁にキスをし
ました。花嫁は、王子の黒い髪かみの毛をなでました。そして、
花嫁と花婿は手に手をとって、りっぱなテントの中にはいつ
て、やすみました。

やがて、船の中は、ひっそりと静かになりました。いまは、
かじとりだけが、かじのところ立っているばかりです。人
魚のお姫さまは、白い腕を船べりにかけながら、東の空に目
をむけて、朝やけをながめていました。お日さまの光がさし
てくれば、その最初の光で、お姫さまは死ぬのです。それは、
お姫さまにはわかつていました。

と、そのとき、おねえさまたちが、またもや、海の面おもてへ浮
びあがってくるのが見えました。おねえさまたちも、お姫さ
まと同じように青ざめていました。見れば、長い美しい髪かみの
毛が、いつものように風になびいてはおりません。ぶつぷり
と、根もとから、たち切られているではありませんか。

「あたしたち、魔法まほう使いに、髪かみの毛をやってしまったのよ。
あなたが、今夜、死なないですむように、魔法使いの助けを
かりに行ったの。そしたら、ナイフをくれたわ。ほら、これ
よ。ねえ、よく切れそうでしょう。お日さまのぼらないう
ちに、あなたは、これで、王子の心臓をつきささなくてはい
けないのよ。王子のあたたかい血が、あなたの足にかかると、
足がちぢこまって、また、さかなのしっぽはが生はえるのよ。だ

から、また、もとの人魚になれるわけ。そうして、水の中へはいつて、あたしたちのところへもどってくれば、死んで、塩からい海のあわになるまで、三百年も生きていられるのよ。

さあ、早く！ お日さまののぼらないうちに、王子かあなたか、どちらかひとりが死ななければならぬのよ。おばあさまは、あんまり心配なされたものだから、白い髪が、すっかりぬけ落ちてしまったわ。あたしたちの髪の毛が、魔法使いのはさみで切られてしまったのと、そっくりよ。

王子を殺して、帰ってきなさいね！ さあ、いそぐのよ！ 空が、うっすらと赤くなってきたじゃないの。もうすぐ、お日さまがのぼるわ。そしたら、あなたは死ななければならぬのよ」

こう言うと、おねえさまたちは、それはそれは悲しそうに、深いため息をついて、波間に沈みましました。

人魚のお姫さまは、テントのむらさき色のたれまくを引きあげました。中では、美しい花嫁が、王子の胸に頭をもたせて眠っています。お姫さまは身をかがめて、王子の美しいひたいにキスをしました。空を見れば、夜あけの空が赤くそまつて、だんだん明るくなってきました。お姫さまは、するどいナイフをじっと見つめました。それから、また目を王子にむけました。王子は夢のなかで、花嫁の名前を呼びました。ほかのことは、すっかり忘れて、王子の心は、ただただ花嫁のことです。人魚のお姫さまの手の中で、ナイフがふるえました。――

しかし、その瞬間、お姫さまは、それを遠くの波間に投げてすてました。すると、ナイフの落ちたところが、まっかに光

って、まるで血のしたたりが、水の中からふき出たように見えました。お姫さまは、なかばかすんできた目を開いて、もう一度王子を見つめました。と、船から身をおどらせて、海の中へ飛びこみました。自分のからだが出て、あわになっっていくのがわかりました。

そのとき、お日さまが海からのぼりました。やわらかい光が、死んだようにつめたい海のあわの上を、あたたかく照らしました。人魚のお姫さまは、すこしも死んだような気がしませんでした。

明るいお日さまをおおぎ見ました。すると、中空に、すきとおった美しいものが、何百となく、ただよっていました。それをすかして、むこうのほうに、船の白い帆と、空の赤い雲が見えました。そのすきとおったものの話す声は、美しい音楽のようでした。といっても、人間の耳には聞えない、まことにふしぎな魂の世界のものでした。その姿も、人間の目では見ることができないものでした。つばさがなくても、からだか軽いために、空中にただよっているのです。

人魚のお姫さまは、そのものたちと同じように、自分のからだも軽くなって、あわの中からぬけ出て、だんだん上へ上へとのぼっていくのを感じました。

「どなたのところへ行くのでしょうか？」と、お姫さまはたずねました。

その声は、あたりにただよっている、ほかのものたちと同じように、美しく、とうとく、ふしぎにひびきました。それは、とてもこの世の音楽などでは、まねすることもできません。

「空気の娘^{むすめ}たちのところへ！」と、みんなが答えました。「人魚の娘には、死ぬことのない魂というものがありませんね。人間に心から愛されなければ、どんなにしても、それを持つことができません。人魚がいつまでも生きていられる命を得るためには、ほかのものの力にたよらなければならぬのです。空気の娘たちにも、やっぱり、死ぬことのない魂はありません。けれども、よい行いをすれば、やがてはそれをささずかることができるのです。」

あたしたちは、暑い国へ飛んでいきます。ここでは、空気がむし暑くて、毒を持っていますから、そのために人間は死んでしまいます。ですから、そこで、あたしたちはすずしい風を送ってあげるのです。それから、空に花のかおりをふりまいて、だれもが、さっぱりした気分になるように、みんなが元気になるようにしてあげるので。こうして、三百年のあいだ、あたしたちにできるだけの、よい行いをするようにつとめれば、死ぬことのない魂をささずかって、かぎりない人間のしあわせをもらうことができるのです。」

まあ、お気の毒な人魚のお姫さま。あなたも、あたしたちと同じように、ま心をつくして、つとめていらっしやいましたのね。ずいぶんと苦しみにお会いになったでしょうが、よくがまんしていらっしやいました。こうして、いまは、空気の精の世界へのぼっていらっしやったのですよ。さあ、あと三百年、よい行いをなされば、死ぬことのない魂が、あなたにもささりますのよ」

人魚のお姫さまは、すきとおった両腕を、神さまのお日さまのほうへ高くさしのべました。そのとき、生れてはじめて、

涙^{なみだ}が頬^{ほお}をつたわるのをおぼえました。――

船の中が、また、がやがやとさわがしくなりました。見れば、王子が美しい花嫁といっしょに、お姫さまをさがしています。お姫さまが、波の中に身を投げたのを、ふたりは、まるで知ってでもいるように、あわだつ波間を悲しそうに見つけていました。

人の目には見えないけれども、人魚のお姫さまは、花嫁のひたいにそつとキスをして、王子にはほほえみかけました。それから、ほかの空気の娘たちといっしょに、空にただよう美しいバラ色の雲のほうへとのぼっていきました。

「そうすると、三百年たったら、あたしたちも、神さまのお国へ浮んでいけますのね」

「でも、もっと早く行けるかもしれませんよ」と、空気の娘のひとり、ささやきました。「あたしたちは、人に見られないうで、子供のいる人間の家にはいつていくのです。そうして、おとうさんやおかあさんをよろこばせて、おとうさんやおかあさんにかわいがられているよい子供を、毎日見つけるのです。そうすると、神さまがそれをごらんになっていて、あたしたちをおためしになる時を短くしてくださるのです。」

その子には、あたしたちが、いつお部屋の中を飛んでいるのかわかりません。でも、そういう子供を見つけると、あたしたちはうれしくなって、つい、にっこりと笑いかけてしまいます。そうすると、すぐに三百年のうちから一年へらしてもらえるのです。けれども、その反対に、おぎょうぎのわるい、よくない子どもを見ると、悲しくなって、思わず泣いてしまいます。そうすると、今度は、涙をこぼすたびごとに、

神さまのおためしになる時が、一日ずつのびていくのです」